

二次元ドリームノベルズ

18  
未 満

# サンダークラップス!

リボーン

THUNDER CLAPS! REBORN

テストメント

試し読み版

羽沢向一  
挿絵：緑木邑

# フレア

## Flare

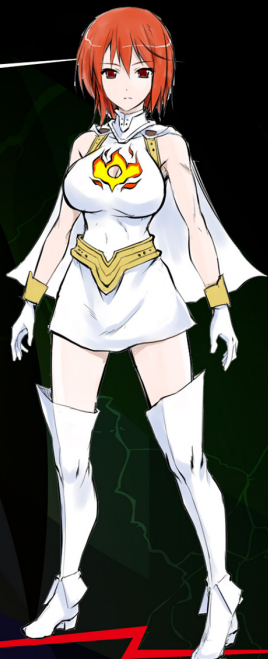
スーパーヒーローチーム

「サンダークラップス」の一員。

凛とした力強い美女。

悪の科学者ドクター・ディスオーダーに創られろ人造人間。

頑強な肉体と怪力を持つ。



## スターサンダー *Star thunder*

「サンダークラップス」のリーダー。

端正で気品のある大人の美女。

地球人の母と宇宙人の父を持つ混血のミュータント。

電気を自在に操る能力を持つ。

# サンダークラップス! リボーン

CHARACTERS テストメント

## Contents

### 第一章

## テストメント を認めない

004

### 第二章

## 手作り 巨大ロボット の挑戦

021

### 第三章

## スーパーヒーロー 世界公開陵辱

034

### 第四章

## 新宿公園の 淫らな惨劇

080

### エピソード

## 三日月の夜

136

# ローズデバイス

## Rose device

「サンダークラップス」の一員。  
清楚可憐で色白な美少女。  
亡父の実験中の事故により、幼い  
ころに重傷を負い、体内にナノマ  
シンを入れている。  
様々な機能を持つアーマーを装着  
して闘う。



# オセロット

## Ocelot

「サンダークラップス」の一員。  
猫科の猛獣の雰囲気を持つ陽気な  
美女。  
南米の自然の精霊たちを認められ  
たシャーマンで、精霊の力を宿し  
てジャガーの獣人に変身して魔法  
を使う。

## Attention

# テストメント

Testament

多発しているオフビート殺人事件  
に関係するとされる、謎のキー  
ワード。

## 第一章 テスタメントを認めない

鈴堂麗りんどうれいはダイニングキッチンで夕食の天ぷらを揚げていた。

二十代なかばの豊満な美しい肉体をつつむ純白の割烹着は、わざわざ専門店で吟味して選んだ逸品。電気コンロにのった天ぷら鍋も、手にした菜箸かっぱしも、浅草は合羽橋道具街で買ったプロ仕様。

衣装と道具にふさわしく、天ぷらを操る手つきは軽やかに美しい。

その手がふいに止まった。

美味しそうな音を奏でる鍋の上に、いきなり小さな、身長十五センチの美少女が出現して、油の表面に立っている。

もちろん立体映像。スーパーヒーローチームのサンダークラップスの自宅兼基地である大きな日本家屋を管理する人工知能のアバターリトルボルト小電光だ。キャラクターデザインは何度もモデルチェンジをして、今は黒髪を大きなツイントールに結って、人気アイドルグループ『みらくるワッフル』のピンクのステージ衣装を着ていた。

立体映像の少女は、自分をデザインした主人を見上げる。

「麗様。テスタメントの新たなテレビニュースが入りました。御指示の通り録画をしています」

「ありがとうございます。今すぐ、みんなを居間に呼んで」

鍋の中から急いで天ぷらを出して、大皿の紙に並べると、コンロを切った。

麗が割烹着のまま居間に入ると、畳に敷いた座布団にもう三人が座っていた。

北原静子は自分用の研究室でのプログラミングを中断して来た。十代後半の華奢な身体

に、地味な白いワンピースを着ている。

柳イザベラやなぎ美果みかと日向燦ひゅうがきららはおそろいのランニングシャツとトランクス。リトルボルトに

呼ばれるまで、二人で軽いスパリングをしていた。二十代はじめのしなやかで力強い肉体を上気させて、浮かんだ汗をタオルでふいている。

麗は空いた座布団に正座すると、リモコンでテレビをつけた。

画面に人気の子アナが映り、事件用のきびしい顔つきでニュースを読みはじめる。

『今日、午後三時過ぎに、東京都葛飾区のマンションで、住人の田端憲明たばたのりあきさんが射殺死体で発見されました。』

現場を捜査した警察によって、被害者は通称『キツツキウツドベツッカー』と呼ばれるオフビートの暗殺

者だと判明しました。ウツドベツカーは小さな鳥に似た生物を操り、鋭いくちばし嘴で脳や心臓に

穴を開けるといふ方法で、わかつているだけでも八人を殺害しています』

「あいつをどうやって見つけたの!？」

静子が高い声をあげて、座布団から身を乗り出した。

「ウツドベツカーの正体をつかもうと、警察やヒーローたちの間で懸命になって探索していたのに……」

\*

オフビート。

それは世界中にいる超人たちの総称。

かつてソビエト連邦が存在した冷戦時代のはじめに、テロリストがワシントンDCへ向けて放った核ミサイルを、ひとりの男が生身で受け止め、生身で宇宙まで運んで捨てた。大勢の人々を救ったその男は、人間を超える肉体を持ち、自在に空を飛び、鮮やかな赤いコスチュームとケープをまとっていた。

男は集まった記者たちへほがらかに笑って、僕は子供のころから『超調子<sup>スーパー</sup>つばずれ<sup>オフビート</sup>』と呼ばれていた、と語った。

最初に世に現れた超人スーパーオフビートに刺激されたのか、それまで知られていなかった超人たちが次々と姿を見せた。

彼らは生まれつきの超能力者、改造人間、魔法使い、あるいは意志を持つロボット、伝説の妖怪や魔物、はては異星人に別次元人までいた。人々は最初の超人にちなんで、彼らをオフビートと呼んだ。

オフビートたちのある者は平凡に暮らし、ある者は特別な能力を悪用した。

そして多くのオフビートたちが、始祖スーパーオフビートにならってスーパーヒーローとして活躍している。

日向燦。鈴堂麗。柳イザベラ美果。北原静子。四人も各々異なる理由で、様々な超能力を得たオフビートだ。

燦はフレア。

麗はスターサンダー。

美果はオセロット。

静子はローズデバイス。

と、ヒーローネームを名乗り、四人でサンダークラップスというヒーローチームを結成している。世にデビューしてから間もないが、人気の高い新進気鋭のチームだ。

\*

四人が予想した言葉を、女子アナが告げた。

『田端さんの胸には「遺言に従い、死を送る」と書かれたカードが乗せられていました。

同じカードを残す射殺事件は、これで六件目になります。過去五件の被害者も全員がオフビートの犯罪者でした』

画面に六枚の写真が映った。テレビを見つめる四人の顔がともにけわしくなる。すでに何度も目にした、これまでの犠牲者たちだ。

いずれもサンダークラップスは相手をしたことがないが、二人は派手なコスチュームを着て大都市で暴れる粗暴犯。ヒーローが駆けつける前に射殺された。

もう二人は、表に現れなかった影の知能犯。ヒーローも警察も把握していなかったアジトで撃たれた。

さらに二人は、驚くべきことに刑務所の独房の中で銃弾を受けた。

『連続射殺犯の素性は今もってなにもわかっていませんが、カードに書かれている言葉から、ネット上では「遺言」テストメントと呼ばれています』



画面が切り替わり、有名な匿名掲示板のスレッドが映し出された。

『犯罪者を捕まえるだけのスーパーヒーローと違って、完全に退治してくれるんだから、  
テスタメントこそ本物の正義だ!』

『テスタメントみたいな、悪党を殺すのをなんていうんだっけ?』

ヴィジランテ

『自警だよ』

『本当に必要なのは、ヒーローじゃなくて、ヴィジランテ!』

『それはダメよ!』

麗の怒声とともに、身体から青白い電光が伸びて、テレビの映像をグニヤリと歪ませた。  
スターサンダーのヒーローネームを名乗る麗は、身体から電気を発して、操る能力を持つ。  
つつい感情が昂たかぶって放った電撃を急いで自身の体内へ回収して、麗は柔和な表情でチー  
ムメイトを見まわす。

『見ての通りよ。テスタメントが犯罪者を殺すたびに、共感する人々が出てきているわ』  
美果が南米育ちらしいオーバーな身振りで、ランニングシャツから露出する両肩をすく  
めてみせた。

『ボクがちっちゃいところに、ボクが生まれた国にも、『軍隊マラブランダ』と名乗るヴィジランテの  
グループがいたよ。全員がカッコつけた黒いコスチュームで、ギャングを何人も殺して、

ちよつとだけ人気が出た。でもヒーローの『骸骨貴婦人』カラベラカトリーナに逮捕されて、結局は消えちゃった。ボクもカラベラカトリーナにあこがれて、よくまねしたっけ」

燦は厳しい顔つきで、画面の中で警察やヒーローの不甲斐なさを語る解説者をにらむ。

「ヴィジランテが消えたのも、その時々ヒーローの活躍があつたからだ。人々に悪を正義と誤解させる犯罪者は、できるかぎり早く捕らえなくては、あ！」

まだ汗に濡れている燦のランニングシャツの上半身に、背後から麗が抱きついた。

「その通りよ！ 偽物の正義に負けないように、サンダークラップスもがんばらなくてはね。さあ、ご飯にしましょう」

「わーい！ 麗ちゃんのお天ぷら大好きっ！」

美果が子供のように歓声を放って重い空気を吹き飛ばし、燦と静子の手を握って、猫のように身軽に立ち上がった。

\*

燦がコンビニエンスストアの壁の時計を見ると、午前一時七分。

ニュースでテストメントの六人目の犠牲者が出たという一報を見てから、ちよつと六時

間がたった。

燦はホッチキスの針の箱だけをレジに出した。机の引き出しに備蓄する針がきれていることに気づくと、深夜だというのにがまんできずに買いに来てしまった。

自宅兼サンダークラップス基地から歩いて十五分ほどのよく利用するコンビニなので、白いTシャツとダークブルーのデニムパンツにサンダルという気楽な格好だ。針の入った箱をパンツのポケットに押しこんで、コンビニを出た。

燦たち四人が住んでいるのは、昔からある住宅街。もちろん住民は近所にスーパーヒーローチームの基地があるとは知らない。鈴堂麗は金持ちの娘で、古い御屋敷を買って、友人三人と女だけの気楽な共同生活をしている、ということになっていた。

住宅街だけあって、この時間に燦以外の出歩く人影もなかった。

いきなりすぐ目の前に男が出現するまでは。

明かりが灯っていない家のレンガ壁の表面から、男の身体が突き出た。

二十代なかばのチャライ顔が、街灯に照らされる。壁から現れたダークグリーンマジの右手は、黒いスポーツバッグの持ち手を握っていた。

壁の前に全身を現した男も、燦に気づいて、二人は同時に声を出した。

「えっ！」

「あ！」

燦のほうが、身体の反応が速かった。ほとんど反射的に右手を伸ばし、ジャージチャラ男の右の手首をつかんだ。

「きみは泥棒か？ あれっ!!」

指に触れるジャージの布の感触がなくなった。五本の指をすり抜けて、男の右腕が離れる。

（物体を透り抜けるオフビートか！）

ジャージ男が燦へ顔を向けて、得意満面にチャラチャラと笑う。

「悪いねー、おねえちゃーん。まーた今度ねー」

（こいつ！ わたしをただのおせっかいな通行人だと思っているな）

自分がスーパーヒーローのフレアだとばれていないのはいいが、燦はわりきれない怒りを覚えて、駆けだすジャージ男の背中へどなりつけた。

「ふざけるな！ 待て！ ええっ!!」

意外にもジャージ男の身体が止まった。それどころか背中から燦へ向かって跳びこんできた。

「嘘っ!!」

燦はとつきにジャージ男を受け止める。緑色の左肩に、ついさつきはなかつた赤い色彩が目に入った。間違ひなく鮮血だ。

「銃撃！」

真夜中だが街灯の光があれば、燦の人間以上の視覚は昼と変わらずに見える。ジャージ男の倒れ方から、真正面から撃たれているはず。しかしまっすぐに伸びる道路の先に人影はなかつた。

「いったいどこから!!」

燦の目がとらえる。二十メートルほど前方で道路と交わる狭い路地から、銃弾が飛び出した。常識通りなら道路を横断して、反対側の家の塀に当たるはずだ。

実際には道路の中央で、銃弾の軌道がほぼ直角に曲がった。明確な殺意を感じさせる動きで、腕の中でぐったりしたジャージ男へ向かつて飛んでくる。

燦は考えるよりも速く右手を男の胸の前にまわし、手の甲で銃弾を受けて、路面へ弾き落とした。普通の弾丸が当たったくらいでは、肌にも傷もつかない。

燦は変身してパワーを発揮するタイプのオフビートではない。狂悪な天才科学者によって兵器として造られた燦の肉体は、常に人間を超える頑強さと身体能力を持つ。

ジャージ男の身体を抱いて、夜の中へ呼ばわった。

「何者だ！ 姿を見せろ！」

返答は新たな射撃だった。消音器サブレッサーをつけているのか、発射音はないが、正面からではなく、背後から、左右から、頭上から、銃弾が曲線を描きながら飛来する。

燦はジャージ男の身体を自分の胸に押しつけて、両腕を素早く動かし、前と左右から来る銃弾を撥ね飛ばし、たたき落とした。背後から来る弾丸は、自分の頭と背中<sup>は</sup>に当たるとまかせる。

「おまえの弾は、わたしには効かない。あきらめろ！」

ふいに射撃が止まった。最初に銃弾が現れた路地から、人影が姿を現した。

ごく普通のダークグレイのスーツとストラックスを着た人物。中には黒いシャツ。そして黒い革靴を履いている。

体型から見て、大人の男。中肉中背。オールバックになでつけた短い黒髪。衣服の上からは身体的な特徴は見受けられない。

唯一目を引くのは、顔だ。

顔に、くすんだ銀色の金属の仮面をつけている。

なめらかな表面には鼻がなく、記号的な二つの目と口だけがあった。両目の穴は黒いミラーシェードになっていて、装着者の目を覗かせない。

単純な造形だが、目と口の微妙な形状で、悲嘆にくれた泣き顔に見えた。

哀しみの仮面から、機械を通して変化させた声が聞こえた。

「テスタメント遺言に従い、その男に死を送る」

「おまえがテスタメントなのか！」

「だが、今ここではテスタメントを執行できそうにないようだゲブツ！」

スーツの腹に、一瞬で距離をつめた燦の拳がめりこんだ。

「うるさいよ」

一撃で意識を飛ばされて、テスタメントはその場に崩れた。

相手が気絶したことを確かめて、燦はスマートフォンで警察とサンダークラブス基地へ連絡した。

\*

警視庁の取調室の壁にあるマジックミラーの窓の前に、フレアと年配のベテラン刑事がなかよく並んで、中を覗いた。

スーパーヒーローとして名前が売れた特典は、警察の捜査にある程度参加できることだ。

そのためには警察との友好関係を築いておかなくてはならないが。

昨夜、燦はテストメントを気絶させてから、警察が来るまでの間にチームメイトが持ってきたフレアのコスチュームに着替えて、警察に経緯を話した。

今朝にはテストメントの取り調べをするという連絡があり、見学を申し出たのだ。

今日もフレアとして警察に來たので、コスチュームを着ている。

フレアのコスチュームは、よく白いチアリーダーと言われる。

外から見るとノースリーブにミニスカートのワンピース。じつはレオタード型のボディスーツのウエストに、スカートに見える布がついた作りだ。

しなやかな両脚には白いロングブーツ。高く隆起した胸では黄色い炎の模様が踊り、背中では腰までの長さの白いケープが下がっている。

フレアが見つめるマジックミラーの向こう側の殺風景な室内では、机を挟んで刑事と被疑者が向かい合う、ドラマでもよくある光景が展開していた。

被疑者は、燦が捕まえたときと同じダークグレイのスーツだが、銀色の仮面は机の上に置かれていた。あらわになつた素顔は、四十代くらいの男。これといって特徴のない平凡な容貌だが、薄い唇を強く閉じて、全身から完全黙秘を貫く堅固な決意がみなぎっていた。

事実、フレアといっしょに取調室をうかがっている山田刑事が、髪やまだの薄い頭を振ってば



やいた。

「あの調子だよ、フレアちゃん」

捜査一課の山田刑事とは、サンダークラブスが活動をはじめてからのつきあいで、何度も協力している。

「やつは息を吹き返してから、ずっとだんまりでね」

「山田さん、あいつの素性はわかったのですか？」

フレアの問いに、山田刑事はメモ帳を出して開いた。

「指紋をインターポールに照会して判明したよ。東南アジア各国で暗躍するプロの殺し屋だ。わかっているかぎりでは、日本に入国したのは今回がはじめてだな。

本名は不明だが『バナナショット』と呼ばれてる。ふざけた名だが、自分が撃った弾の軌道を自由に曲げられるオフビートだ。くわしい資料はメールでローズちゃんに送るよ」  
「おかしいですね。その能力の暗殺のプロなら、標的の前に姿を見せるのは避けるはずですよ」

「わしもそれがひつかかかってるんだ。フレアちゃんの身体は防弾だ。さっさとしっぽを巻いて逃げりゃあいい。」

そもそもバナナショットは金のためにしか動かない生粋の殺し屋だ。悪党を殺してまわ

る無料奉仕をするやつじゃない。しかし銃弾の線条痕は、六件のテストメントの殺害のものと同じしてる。昨夜の無名のコソ泥に至っては、たまたま目についたから殺そうとしたとしか思えんよ」

あいかわらず沈黙するバナナショットを、フレアはじつと見つめた。視線がひとりで、机の上に置かれた銀の仮面の泣き顔に誘導される。金属製のシンプルな表情が変化するわけでもなく、今やただの置物でしかないのに。

「あの仮面は、バナナショットの本来のコスチュームなのですか」

「その記録はないね。これまでのやつの仕事ぶりを考えれば、目立つコスチュームを着るタイプではないはずだ。うちの科捜研がざっと調べたが、ただのお面ではなく、なにか仕掛けがあるらしい。とはいえ科捜研の技術では、内部の透視も分解もできなくて困つとるよ。いまのところ、わかっているのはこれくらいだな」

「ありがとうございます」

「フレアちゃんは、今日はこれから新宿のチャリテイイベントに出るんだらう。そろそろ時間じゃないかな。なにかわかったら連絡するよ」

「イベントのことを、よくご存じですね」

「わが家はサンダークラップスのファンだからな。今日のイベントにも、長男の史郎しろうが行

ってるんだ」

山田刑事がにっこりと笑い、スマートフォン画面を見せた。大きなサンダークラブのポスターの前に、山田刑事と二十代の青年がなかよく立っている画像だ。見ているだけで父子が円満な様子が伝わってくる。

「よく似ている息子さんですね」

「そうかい。史郎は、まあ、わたしとは正反対の学者志望だね。大学で、わたしにはさっぱりわからない難しい外国の本を原語で読んでるよ」

ますます山田刑事の顔が、ニコニコと崩れた。本庁捜査一課の鬼刑事が放射するほどのした空気に触れて、フレアも顔をほころばせる。

「今日は屋上から飛ぶかい。テストメントがいると嗅ぎつけたマスコミが外で騒いでるからな」

「そうさせていただきます」

フレアは山田刑事と連れだつて警視庁の庁舎の屋上に出ると、ヘリポートの中心に立った。一礼すると、左右のブーツの底を白いHの文字からふわりと浮き上がらせ、一気にスピードを上げて飛翔する。

青空に消える白い影を、山田刑事が目で追い、つぶやいた。

「スーパーヒーローが飛んでいく姿は、いつ見てもいいねえ」

スマホの画面を指でなぞり、別の写真呼び出した。昔ながらのフィルムで撮影した古いカラー写真を、パソコンで取りこんだもの。

まだ髪が黒くフサフサの山田刑事が、赤いケープと赤い髪をひるがえす美しい女性スーパーヒーローに抱きかかえられて、青空に浮いている。華麗なコスチュームがぴつたりと貼りついた豊満なバストが、若き山田刑事の胸に押しつけられてたわんでいた。この構図ならば、カメラを持つ撮影者も空を飛んでいるはずだ。

若き日の、この写真以上のめくるめく体験を思い浮かべて、ベテラン刑事はひとりであつた。



「フレアのパンツが丸出しだ！」

「パンツ、パンツ！」

パンツの大合唱を浴びて、フレアの全身が燃える思いがした。普段のヒーロー活動では、スカートがめくれようと、破かれようと、まったく気にしていない。

（なのに、こんなにも恥ずかしいなんて……）

胸を露出しているのも恥ずかしいが、それとはまた別のものがある。ステージのモニターには、動きを封じられて、粘液でヌラヌラと輝く乳房を放り出し、いくつもの機械の手でスカートをめくり上げられている情けない姿が大写しになっていた。

（ぶざますぎる……）

苦悩するフレアのあらわな股間に、マニピュレーターのカッターが接近してきた。

「ああっ、や、やめろ！」

思わずフレアは大きく身じろぎする。両腕を縛る金属触手がきしみの悲鳴をあげて、危うくちぎれそうだ。

「まずい！」

ハツとして、触手が壊れないように懸命に身体を抑えた。それでもわずかに震えてしまいう下半身の白い布に、高速振動する鋼の刃が触れて、無抵抗で切り裂かれていく。

「あつあああああ！」

カッターが機械の精密さと正確さを發揮して、へその下から右の太腿の付け根を通過すると、尻のなかばまで行つてUターンした。そのまま再び両脚の間を通り、へその下までもどる。

はらり、と一枚の白い布が、フレアから離れた。

ビチャリと地面に落ちた布きれは、絶頂を強制された女の体液でじつとりと湿っていた。テレビのカメラマンのひとりが地面に這はいつくばり、フレアの前に迫ってくる。逃げたくても逃げられない女性スーパーヒーローの下半身をローアングルで撮影する映像が、ステージのモニターに大々的に映された。

コスチュームの股間部分に細長い穴を開けられて、女性器と肛門の周囲だけが外に露出させられた。ただ秘部を接写するだけでなく、フレアの引きつった表情も的確に入れていく。

あきらかに放送禁止の映像を、テレビはどうしているのかはわからないが、ネットの画像は世界を駆けめぐっているだろう。全地球に配信されているフレアの恥丘は、透明な粘液に被われて、ふっくらと美しく盛り上がっている。だが今も肉唇をピッチリと閉じて、女の秘密を内に隠していた。

すぐ後ろの肛門も、汗まみれながら、まだ若いつぼみ蕾のようにきつくすぼまっている。

男たちは静かだった。今までと違って息を呑み、じつと女性スパーヒーローの最大の秘密を凝視している。全員の反応が同じなものも、テレパシー支配のせいかもしれない。

下品なコーラスがなくとも、高熱の視線が自分の下半身に凝集していることは、いやというほど感じる。

視線をさえぎって、フレアの顔の前をマニピュレーターが横ぎった。

先端のノズルが目に入り、表情が歪み、引きつる。

「ひいっ！」

媚薬粘液があらわな女性器と肛門に噴きつけられた。媚薬のほとんどが、股間に、下腹部に、そして尻に吸収されていく。

「あ、はあああつ、あうううううう！」

たちまち紅蓮の火炎が下半身に燃え盛り、すぐに鎮火した。後には下半身を冒す苛烈な疼きが残る。膝立ちの腰がひとりでに動き出した。前に並ぶ男たちとカメラの列へ見せつけるように、媚薬まみれの剥き出しの恥丘を何度も突き出してしまふ。

肉眼とレンズの前で、フレアの二つの花がほころびはじめた。恥丘が縦に割れて、内側のピンクの花弁を空気と視線に触れさせる。



肉襞はすっかり充血して、ぷりぷりとふくらんだ。自らの花蜜に濡れて、キラキラと陽光を反射する。

クリトリスもひとりでに包皮を剥いて、高くしこり勃った。

尻の奥の蕾もゆるみ、もの欲しげに広がった。愛らしい肛門を指先でつつけば、やすやすと呑みこむように映っている。

湧き起こる下半身の疼きに共鳴して、胸の疼きも増幅していく。悩ましく全身をくねらせて煩悶するフレアの前に、また新しいタイプの三本のマニピュレーターが現れた。

三本の先端には、黒く細い毛が密生する小さい刷毛はけになっている。一本は右の勃起乳首の前に移動した。もう一本は左の乳首の前。そして最後の一本は下腹部へ潜りこみ、ふくらんだ陰核にゆつくりと接近する。

(シヨベルカーから刷毛を作れるのだろうか?)

と、フレアの頭をかすめる。直後に、三か所で同時に電撃が走り、思考をすべて吹き飛ばされた。

乳首と女芯に刷毛が押しつけられ、肉の筒と粒を磨くように小刻みに動き出す。

女の最も敏感な三か所が、邪悪な媚薬によっていつそう鋭敏にされている。普通なら感じすぎて激しい苦痛になるはずだが、すべて膨大な快感となって全身に押し寄せた。

普段ならなんの脅威でもない小さな毛の束が生む悦楽で、神経をえぐられ、精神を削り取られていく。

「おああああ！ くひいっ！ ふあああああああつっ！」

乳首とクリトリスを責められはじめてからごくわずかな時間で、快感の限界に達した。

目の前がまばゆい白光に埋めつくされる。意識が光に包まれるなかで、またも両脚が地面からフワッと浮き上がった。

フレアは浮上しながら、頭をのけぞらせる。また意図しない声が喉から飛び出し、青空へ放たれた。

「イクううっ！」

空中の身体が弓なりにのけぞり、開いた女性器を男たちへ向かって差し出す姿勢になる。  
「くああああ、イククうう——ううううッ!!」

叫び声が太陽へ向かって立ち昇ると同時に、開いた肉襞の中心からどつと透明な蜜汁があふれた。熱く芳醇なエクスタシーの体液が、自身の太腿をびしょびしょに濡らし、地面を湿らせる。

「イッた！」

「フレアがまたイッたっ！」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

正義のスーパーヒーローチームの原点!

二次元ドリームノベルズ

# サンダー グループス!

淫獄の四天使

小説:羽沢向一

挿絵:カワギシケイタロウ

全国書店、各電子書籍サイトにて好評発売中!



シリーズ作品の電子書籍版も好評配信中!



正義のスーパーヒーローチームが帰ってきた!

二次元ドリームノベルズ

# サニタークラップス! リボーン

THUNDER CLAPSI REBORN

パラサイトクライシス

羽沢向一 挿絵: 緑木 邑

各電子書籍サイトにて  
好評発売中!